

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

墓碑銘「山ときどきのころ」——我が恩師に

極めて個人的なことではあるが、かつて大町北高校の校長をされたことのあるその人のことを書くことをお許しいただきたい。その人の名は小林俊樹。僕の高校時代の恩師である。北高の校長時代には、長野県高等学校登山専門部の専門部長もされたので、古い先生方にはご記憶の方もおられよう。僕と同じ国語科の教師だったが、先生からは国語以上に山と人生を教えていただいた。そして長い人生において、高校を卒業してから一人の人間として扱ってくださり、育てていただいた。

若いころから日本山岳会に所属し、W・ウェストンや播隆上人の研究者としても著名で、いくつかの著作も残されている。徳本峠と上高地がお好きで、6月のウェストン祭を欠かしたことはなかったが、先生が最後に上高地を訪れたのは、2012年の6月、やはりウェストン祭のときだったと思う。このときは、上高地のウェストンの碑が戦中に金属供出の憂き目にあって一度取り外されたのだが、戦後再び取り付けられたときの貴重な写真が発見され、それを先生が確認されたことを山岳会の総会で報告するための上高地入りだったが、小生は、2日前に急に運転手を命ぜられての同行だった。

最後に一緒に山に登ったのは、それよりさらに前の2006年のこと。先生の古い山仲間、紀行作家の岡田喜秋さんの傘寿の祝いで「傘」のつく山である四賀村の傘山に登ったときのこと（かわらばん 179号/2006・6・29）だった。当時先生は72歳、そのときは先生ご自身の傘寿のときにもという思いもあったようだが、すでにここ数年めっきり弱った先生にその思いはかなわなかった。また母校松本深志高校が、山岳史上に汚点を刻むことになってしまった1967年の西穂落雷のときには、急遽駆けつけ、救助活動にあたった先生は、毎年8月1日にはやはり西穂への慰霊登山を欠かさなかったが、それもここ数年はできなくなっていた。その事故からももう50年の春秋が巡ってくる。

先生が入院され、だいぶお加減が悪いという連絡を受けたのは、十一月も末に近いころであった。先輩と二人で病院に見舞ったときの先生は、すでに言葉を発せる状況ではなかったが、満面に喜びを表して僕らを逆に元気づけてくださった。

毎年年末には、世代を超えて、同窓生が集まり、先生を囲んで旧交を温める会がもうかれこれ三十年近く続いている。その日は十二月二十九日六時開宴と決まっておき、語呂合わせで「十二分にくむ（二九六）会」と称し、先生にとっても我々教え子にとってもどうしても外せない重要なひと時であった。お見舞いから立ち去るとき、先生の快癒を願い、今年の会での再開を誓った。その先生が、それから一週間もしないうちに他界されてしまった。

今改めて先生の言葉をかみしめてみると、少々へそ曲がりなところもおありになる先生の、山に対する慧眼には感嘆する。

その著『山ときどきのころ』に曰く、「今は里にも山にも季節はない。季節を拒否し、自然を自然たらしめない所に、現代文明の思いあがりがある。毎季の山岳事故はこのことと無縁ではあるまい。だが、自然（山）は人を区別しない。区別するのは人間の側であり、人間はそれぞれの個性を通して自然に対応する。私の対応もその一つに過ぎない。」

また曰く「過去にどれほどの山歴があろうとも、そのたびごとに山は新しい。山々の魅力も、恐ろしさもまたそこにある。・・・山は不動にして常にうごいている。『山ときどきの心』とは、そうした山々に対する『時々初心』であり、『老後の初心』である。心したいものだ。」と。常に山に対しては謙虚な人であった。

高校時代に、先生が山を案内して下さったのが、今でも昨日のこのように臉に浮かぶ。先生とのはじめての山は、徳本峠を越えて上高地入りした高校一年の夏のこと。先生は別の著書『北アルプス —— 一万尺のふみ跡をたずねて』の冒頭では、この峠のことを「・・・眼前に屹立する穂高の風貌は、ことばを拒否して人々の疲れを一気に癒してくれる。二一三五mの峠の魅惑は、おそらくこの一瞬の景観の中にある。」とも『ことば』などというものの限界を、いやというほど知らしめてくれる。」ともお書きになっておられ、冒頭でも書いたとおり、とにかくこの峠にはべた惚れであった。日本山岳会信濃支部の会員として先生は、その年も信濃支部の主催行事である6月のウェストン祭でこの峠を越えておられたのだが、入学したての僕らを、お気に入りのこの峠にいざなって下さったのだった。

暑い夏の太陽に照らされて島々から二股までのながい林道をひたすら歩きながら、「上高地はともかく穂高や槍の味わいを、本当に噛みしめるためにも、一度はこの峠をこえねばならぬ。」と、まだ穂高や槍のなんたるかも知らない僕らに語ってくれたのだ。あるいは雲に隠れていたのかもしれないが、不肖の弟子である私は、このときの峠から見た穂高の雄姿はさだかには覚えていない。しかし、高校1年生にはやや厳しかったこの山行が、その後の僕の山人生の原点になった山行であったことは間違いない。

「人生に旅と酒がなくなってしまうたら、どんなにか寂しく単調なものであろう。」旅(山)を楽しみ、こよなく酒を愛した豪快な先生の笑い声はもう聞けない。しかし、先生の教えは、いつまでも我々教え子の心の中に生きている。

先生が自らの墓碑銘に刻んだことばは「観自在」。子宝に恵まれなかった先生が、一番愛しておられたのはもちろん奥様であるが、その奥様からも僕ら教え子はかわいがってもらった。少し前にその奥様が亡くなり、まるであとを追うように旅立たれた先生は、今頃奥様と二人好きな酒をたしなみながら、あの世からあぶなっかしい僕らを見守って下さっていることだろう。先生、奥様とお二人で安らかにやすみください。私もこれからも安全登山に努めます。合掌。

*小林俊樹先生を送る会は、12月18日(日)午後2時から、松本市の深志教育会館で執り行われます。

編集子のひとごと

人生にはその「ときどき」の分岐点になるような場面がある。先生亡き今、遺稿となつたいくつかの著作をひもとくと、その教育者としての側面も垣間見られ、自分のおぼつかなさ身にしみる。40年近く前の卒業式のその日、「毎年1月2日はお前たちと一緒に酒を飲むために空けておく。」それが先生の僕らへの餞のことばの一節だった。・・・悩んだときにはいつでも訪ねよ。先生の本心はそこにあつたのだと思う。僕自身、その1月2日に先生のお宅をお訪ねする機会はそれほど多くはなかったが、「人生のときどき」に先生には育てていただいた。定年を3年後に控えた小生にとって、定年一年前に潔く教職を辞した先生の足元にも及ばない不甲斐なさを今改めて恥じ入るばかり。(大西記)